

【書 評】

武 田 友 加

『現代ロシアの貧困研究』

東京大学出版会 2011. 2 xii+247 ページ

2011年にソ連崩壊後20年をきっかけとしてロシアの経済界で移行後の生活水準についての討論が行われ、著名なロシアの経済学者が参加した。主な結果は「Вопросы Экономики」というロシアのトップ経済雑誌に発表された(Ясин, 2011, Ефимова, 2011)。この論文では、現代ロシアの経済学の弱点がすべてあらわれた。具体的には、マイクロ・データの利用が少ないこと、統計的基盤及び計量的な分析が弱いこと、そして「貧困」という重要な社会問題に対する注意が足りないことだ。特に貧困問題についての記述が短く、内容も絶対的な貧困人口、貧困の深刻さの動向、そして貧困人口の構成の指摘に過ぎないものであった。この報告を見る限り、ロシアの貧困研究は初期段階であると言える。これに対して、本書はマイクロ分析及び詳細な計量的手法にもとづき、「貧困」という現象を綿密に研究し、ロシア経済の理解を深めるための貴重な研究成果である。

本書の特徴はロシアの家計の膨大な個票データを分析し、現代ロシアの生活水準を都市と農村という観点から考察して、不平等の原因や貧困緩和の政策を明らかにしていることである。現代ロシアの貧困問題に焦点を合わせつつ、本書は以下より構成されている。

「序章 貧困の研究史と問題の所在——社会主義体制下ソ連と移行経済下ロシア」では、ソ連と移行経済後のロシアの貧困研究を分析している。筆者は都市・農村の貧困の比較、1990年代の貧困動態、そして貧困層の生活水準の上昇と経済成長とのつながりを取り上げ、貧困緩和政策及び生活水準安定のための経済行動を検討することを目的としている。

「第I部 ロシアの貧困の経済分析の基層」の「第1章 ロシアの統計調査——貧困動態分析との関係を視点として」において三種類の統計調査につ

いて考察している。ロシア統計局の家計予算調査や労働力調査には様々な利点があるが、筆者は計量分析の基盤としてロシア長期モニタリング調査(RLMS)のデータを用いることにしている。なぜならRLMSの利用によってパネル・データの分析及びマイクロ・データへのアクセスが可能になり、その他の統計調査よりも利便性が高いためである。

「第2章 ロシアの貧困の測定」は貧困測定方法を検討し、本書の実証分析において採用した方法を明らかにしている。生活水準の分析は所得ではなく、支出に基づき行われている。次にロシアの現状にあたって等価尺度の計算の必要性、ロシア連邦統計局が発表している最低生活費(ベーシック・ニーズ費用法に基づく貧困線)の特徴を考察し、地域別格差の貧困比率の影響を取り除くために、地域別最低生活費を活用すべきという結論が出されている。

「II ロシアの貧困動態の諸相」では、移行経済下ロシアの貧困の特色及び都市と農村の比較研究がなされている。「第3章 移行ショックと貧困——移行経済下ロシアの貧困の原因と特徴」は1990年代のロシアの移行的経済における「突然の貧困」という現象を分析する。貧困の要因として経済力の低下、企業の改革、ソ連時代から継続するパターナリズムの行動、賃金の低下などが指摘されている。移行経済の時代で貧困や不平等は急速に拡大し、貧困者の中では働く貧困者・多産家庭・農村貧困という三つのグループが目立つようになった。貧困に対する脆弱性も極めて高くなり、貧困から抜け出すチャンスは多かったにもかかわらず、生活水準は貧困線に近い者が多く、生活は不安定であった。これに基づいて筆者は、高い貧困の流動性によって今後の分析は静態的なものだけでなく、動的な本質も持つべきであると結論している。

「第4章 都市と農村の貧困動態と労働力状態」では、都市と農村との比較分析が行われ、貧困動態と労働力状態との関係が検証されている。都市の貧困者数は農村のそれを上回っているが、都市では一時的貧困者が多く、貧困から抜け出す可能性は高い。それに対し農村の特徴として、貧困は長期化すること、個人副業経営や年金の受給は貧困リスクを緩和

すること、そして慢性的貧困は職業の初級地位に関係が強いことを取り上げている。2000年代に経済成長の結果として、都市でも農村でも貧困比率は減少した。しかし、農村貧困は以上の特徴を持ち、貧困削減は都市より困難であり、社会支援の改善、貧困から抜け出すような態度、地域産業の育成、農業以外の雇用の促進、部門間・地域間労働力の移転などの政策が必要であると指摘されている。

「第5章 都市と農村の貧困緩和と貧困化の決定要因」において、都市と農村の相違性が明らかにされている。具体的な貧困緩和として農村では、男性であること・個人の教育水準・追加的職業は貧困から抜け出す要因にはならないことである。農村の貧困化の要因でも、都市とは異なり、高齢であること・職業の初級地位・地域へのマクロ経済ショックは関係ないという結果となった。都市では個人または家計の自助努力で貧困緩和は可能だが、農村では農外雇用及びより高い賃金で追加的に従業をする機会が少なく、個人副業経営ができて収入を大幅に上昇させるのは困難である。自助努力の対策が難しいために、政府または地方自治体の役割が重要になっている。

最後に、「終章 地域間格差とプロ・プア成長」では、地域レベルで地域内総生産に対する貧困の弾力性が推計されている。富裕地域は貧困地域より経済成長の利益をうけているため、ロシアの経済成長はプロ・プアであるとは言えないし、貧困削減のために成長は必要だが、十分ではないと結論されている。政府の役割としては、経済成長の結果がトリクル・ダウンするためのメカニズムの作成、つまり貧困線付近に暮らす「貧困に脆弱な人々」の生活水準の保護、農村から都市への労働力の移転を阻害している要因の除去、そして貧困緩和政策の改善が取り上げられている。

以上は評者による本書の概要である。評者が本書を読むうえで、自然に関心が向かった三点を指摘したい。第一に、貧困の分析の中で「貧困はなぜ悪いのか」という極めて単純に思われる問題は無視できないが、本書では十分述べられていない。例えば、経済格差の研究において格差が資源配分の非効率性及び個人消費の低下などの原因となり、経済成長を障害するということが指摘されている(The World

Bank, 2005)。貧困は人的資本の低発展につながり、成長の基盤を弱体化させる。ロシアの場合、特に貧困率が高い農村地域では都市に比べて死亡率が高く、平均寿命は短いものであり、貧困による早期死亡リスクが高いと考えられる(注意)。貧困による農村地域への社会的インパクトの詳しい分析がなされれば、ロシア貧困研究への関心、貧困対策の重要性の上昇に繋がると思われる。貧困による社会資本崩壊の深刻さ及び経済成長への影響は今後の研究において重要な課題になるべきである。これに関連して第3章(pp.94-98)で指摘されたパターンリズムの問題も追加できる。パターンリズムを考える際、特に1990年代、ロシア型の「企業城下町」及びこの周辺の農村地域における、貧困者に対する企業の支援の評価は本書のように経済的な基準より、社会的な・人道的な枠組みで行うべきだと思われる。

第二に、ミクロ・データの利用と精密な統計的な分析は本書の最大のメリットであるが、一部のデータは「混乱期」に限られている(第2章では1997~2002年、第4章と第5章では1994~2000年)。しかし、2000年代の成長は明確な特徴を有し、混乱時代に比べて貧困動態・状態は大きく変わっている。終章の分析期間は2006年まで延長されたために、総生産に対する貧困の弾力性の混乱期(1995~2000年)及び成長期(2001~2006年)の相違性が明らかになった。特に貧困の研究にとって、2000年代の経済成長のより詳細な分析が不可欠であると指摘できる。

第三に、終章で実施されている貧困の経済成長に対する弾力性の分析は、地域ベースでおこなわれているが、地域の大きさを表す人口・貧困者数などは考慮されていない。これによって目立っている最終的な結論(「ロシアの経済成長はプロ・プア成長とはいえない」p.205)は、人口が少なくそして減少している15の「プア地域」だけに関係がある。しかし、経済成長によって貧困者数が多い地域も含めたすべてのロシアの地域において貧困状態は改善された(統計データはp.189で紹介)。成長の成果は都市住民を中心にトリクル・ダウンしたことが終章の分析で完全に証明されていない。弾力測定モデルに地域の大きさを導入すれば、地域ベース分析はより理解しやすくなると思われる。

しかし、以上の3点は先ほど述べた本書の意義が損なわれるほどの欠点ではない。マイクロ・データを中心とした豊かな統計資料の活用、精密な計量的分析、詳しい先行研究の整理、都市と農村との比較、貧困者の経済行動の分析などの本書の特色は評者に深い印象を与えた。本書は経済学のディシプリンを用いたロシアの貧困問題研究への重要な貢献であるということが高く評価したうえでの感想である。

注意

評者が生まれ、成人になるまで毎年三ヶ月以上暮らした村(ロシア北西地域、レニングラード州・ノヴゴロド州・ボログダ州隣接地域)では、評者の「竹馬の友」ともいえる12人の男性は1990年代に貧困者となり、3人は結核などの病気で死亡、2人はアルコール中毒で死亡、2人は通勤時の交通事故

で死亡、1人は自殺、1人は不法的な森林伐採に反対し、マフィアに射殺された。生存者の3人は企業から現物支給・食料支給など様々な支援を受け、個人副業経営の行動をとった。評者の個人的な経験から判断すれば、農村貧困は40~50歳で死亡するという意味を持つ。

参考文献

- Ефимова Е. (2011) Низкооплачиваемые работники на рынке труда Российской Федерации: о чем молчит российская статистика. Вопросы Экономки, No. 10, 2011, с.77-90.
- Ясин Е.и др. (2011) Социальные итоги трансформации, или 20 лет спустя. Научный доклад. Вопросы Экономки, No. 8, 2011, с.77-96.
- The World Bank (2005) Equity and Development, World Development Report 2006.

[Andrey Belov]